

答え合わせ・解説

問1	答え 1 魏	3世紀の中国は魏・呉・蜀の三つの国が並び立つ三国時代にありました。日本の邪馬台国を治めていた卑弥呼は、その中の一国である魏に朝貢し、皇帝から「親魏倭王」の称号を得ることで自身の権威を高め、国内の統治を有利に進めようとしたと考えられています。この出来事は、魏の歴史を記した『魏志』倭人伝の中に詳しく記述されています。
問2	答え 1 中国の王朝である漢（後漢）の皇帝が、倭の奴国の王に与えたものである。	この金印は、1世紀（紀元57年）に倭の奴国の王が中国の後漢へ使者を送った際、光武帝から授けられたものです。中国の歴史書『後漢書』東夷伝には、この出来事に関する記述があり、江戸時代に福岡県の志賀島で金印が実際に発見されたことで、当時の日本と中国の間に公的な外交関係があったことが証明されました。
問3	答え 3 鉄器が実用的な武器や工具に用いられる一方で、青銅器は主に集団をまとめるための祭礼や権威の象徴に特化していった。	弥生時代の日本において、金属器は「実用の鉄」と「祭祀の青銅」という二面的な使い分けがなされていました。稲作の普及に伴って集団が大きくなると、人々をまとめ上げるための儀式や、その集団の頂点に立つ指導者の権威が必要となりました。そのため、美しく加工しやすい青銅器は、実用性よりも、見る人を圧倒するような象徴的な価値を求められるようになったのが大きな背景です。
問4	答え 1 稲作が始まった当初は木製の農具が中心であったが、次第に大陸から伝わった鉄器なども使われるようになった。	弥生時代には大陸から鉄器と青銅器がほぼ同時に伝わりました。鉄器は主に工具や農具などの実用品として、青銅器は銅鐸や銅鏡のように祭祀・儀式用の宝物として用いられました。稲の収穫には主に石包丁が使われ、穂の部分のみを摘み取る「穂首刈り」が行われていました。牛馬耕が普及するのは平安時代以降のことです。
問5	答え 1 稲作が始まり、余剰生産物や土地・水をめぐる集落間の争いが激しくなったため。	縄文時代から弥生時代にかけて、大陸から稲作が伝わったことで社会は大きく変化しました。米という貯蔵可能な余剰生産物が生まれたことで貧富の差が生じ、水田に欠かせない土地や水を奪い合う「戦争」が頻発するようになりました。吉野ヶ里遺跡に見られる濠や柵、物見やぐらといった設備は、こうした争いに備えた防御施設としての役割を持っていました。
問6	答え 1 収穫したコメを富として蓄えることが可能になったため、蓄えの多寡による貧富の差や身分の違いが生まれた。	稲作によって食料の安定的な確保が可能になりましたが、同時に収穫したコメを貯蔵できるようになったことで、それが「富」としての価値を持つようになりました。これにより、多くのコメを持つ者と持たざる者間で貧富の差が生まれ、さらに水や土地を巡るムラ同士の争いが発生し、社会の階層化が進む要因となりました。
問7	答え 2 環濠集落	弥生時代には、食料の備蓄や土地の所有をめぐる集落間での争いが生じました。そのため、集落の防御機能を高めるために周囲を堀や柵で囲む工夫がなされました。代表的な遺跡として、佐賀県の吉野ヶ里遺跡が有名です。
問8	答え 1 高床倉庫	弥生時代には本格的な稲作が始まり、収穫した米を保存するための専用の建物が造られました。銅鐸などの表面に描かれた当時の絵画からも、梯子を使って登る床の高い建物の存在が確認されています。居住用の竪穴住居とは区別して使われていました。
問9	答え 1 鉄器	弥生時代には大陸から鉄器と青銅器という二種類の金属器が同時に伝わりました。青銅器が祭祀（祭り）や儀式のための道具として用いられたのに対し、鉄器は硬度が高く鋭い刃物を作ることができたため、戦いのための武器や、木材を加工する工具、開墾効率を高めるための農具の刃先として幅広く活用されました。